



名家手簡

七集

下

千九百  
259  
14止



門子 6  
卷



柴野栗山

名邦彦字彦輔別号古愚五峯山房濱州高松人  
後仕大府文化四年没七十二

逢原堂藏

形はしるまを古くしるまを  
しるまの物に修得する  
子も人、しるまの物  
又も修得する  
字はしるまの物に修得する



困るは後心はあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに

ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに

ふりしはなほあはれなるに  
ふりしはなほあはれなるに

ふりしはなほあはれなるに

西依成齋

名周行字潭明稱儀平若州人任京師  
寬政九年没九十六

小野田氏藏

此深年平去去初  
乃心始之乃母後  
何事空也後佳年  
心乃之乃不皆其意

此生無別美居上  
乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃

花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
P 花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心

花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心  
花よりかたはる花の葉の  
心はるる心はるる心



と物...  
加...  
橋...  
地...  
之...  
セ...  
お...  
と...  
物...  
お...  
お...

と物...  
加...  
橋...  
地...  
之...  
セ...  
お...  
と...  
物...  
お...  
お...

四日午

増...  
古...



頼春水

名惟寛字千秋一字伯粟又号霞崖藤州  
竹原人仕國侯文化十三年没七十二

新しき秋の月夜  
 宿老の雨は昔の  
 子どもらの声  
 残雪の跡  
 地元の花

常しき秋の月夜  
 宿老の雨は昔の  
 子どもらの声  
 残雪の跡  
 地元の花

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

約多志

西条の史

尾藤二洲

名肇字志尹一号約出豫州川上人後仕  
大府文化十年没六十九

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

且又孔子論之曰一卒一好名  
心自了名于人而歌一  
可要古字と名も曰言可有  
以之貴と名古中神一凡自  
已此為自修也  
皆片々ふすは是也

立ふは六傳者法也  
可者二あはと思はる  
おもはるは  
九月

何田法也 尾

西山拙齋

名正字士雅一号至樂居備中鴨方人  
寛政戊午没六十四

竹内と云ふは紅の村下  
向ふに成性 淨此らに  
法あるを以て法華と云ふは  
也といふ聲を法華と云ふは  
七を以て法華と云ふは  
沙事あるを以て法華と云ふは

村交程の事なるは  
あるを以て法華と云ふは  
も有るを以て法華と云ふは  
初る事なるは法華と云ふは  
有及 是を以て法華と云ふは  
相戸に流るるを以て法華と云ふは  
有るを以て法華と云ふは  
有るを以て法華と云ふは

一 部の録合或木  
けふ及るるは久し  
校訂あましく  
他は可なり  
五白  
神  
子

日  
と  
記中  
臨  
而  
し  
控  
一

とては二つありては  
此の道にたつては  
道徳の道にたつては  
今も世にたつては  
市井の道にたつては  
己の道にたつては  
又た世にたつては  
又た世にたつては

とては二つありては  
此の道にたつては  
道徳の道にたつては  
今も世にたつては

あま

同いふことありては

婿井仲の尊兄

とては二つありては

市河寬齋

名世寧字子靜一字嘉祥一號半江西野上毛人  
仕富山侯文政三年没七十二

鐫木氏藏

祥花院 小坊  
定と氣はりぬ皆に  
口陰と中日月を  
母存ぶあつて之

かゝるべきは  
まわりのぬれ  
と  
一  
口  
口  
口

予一以爲之極節  
 名海極之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節

龜井南冥

名魯字道載筑前姪濱人文化  
 十一年没年二

達原堂藏

時以去冬予未遊之頃九  
 兼是  
 出所食之由中與大春之也  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節  
 予一以爲之極節



口研の印の名家の書  
様々たる物然るに各各  
の成俾に至る迄其の  
貴況無難なり一向の  
謙遜の意を大旨に  
味ひ給ふ事と云ふ  
無事にして便給りし  
物

之の素可なり  
暇に中印の物作  
編年録の如き  
方如きもの  
私書に於て  
持てし心算の  
解人



お徳、月夜に

おね

お井道

うしろ

岡野

お史

塚田大峯

名席字耕親称多門尾州人

全

塚田大峯

一平

お徳

お史



七  
書

同

岩瀨華沼

名行言字子言稱勘平仕島原侯  
文化中七十余没

全

七月五日  
先此  
此  
先此  
此  
先此  
此  
先此  
此  
先此  
此  
先此  
此  
先此  
此

峰山此山深山中此山也  
宜之亦文游也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも  
是も亦文遊也少くも

月夜の静けさ  
山々の緑意  
水の流れ  
風の音  
鳥の囀り  
虫の鳴き声  
人の足音  
馬の蹄音  
鐘の音  
鼓の音  
笛の音  
笙の音  
琴の音  
琵琶の音  
尺八の音  
三味線の音  
太鼓の音  
盆踊りの音  
火鉢の音  
お茶の音  
お酒の音  
お風呂の音  
お寝の音  
お起きの音  
お食事の音  
お洗濯の音  
お掃除の音  
お風呂の音  
お寝の音  
お起きの音  
お食事の音  
お洗濯の音  
お掃除の音

勿國之君...  
 之...  
 其...  
 八月...

逢原君...  
 侍史...  
 其...

司馬江漢  
名峻字君岳一号春波樓  
始作銅版蘭画

全

乃亦于...  
 其...  
 其...  
 其...  
 其...

得之... 且石版

... 且石版

... 且石版

...

...

因際... 司... 海



